

七支刀

この七叉の剣は、千年以上にわたって石上神宮に収められてきた。1870 年代まで、この刀は単に珍しい鉢だと思われていた。好奇心旺盛な菅正朝宮司（1824-1897）が鎌の層を払い、歴史を変えるような金象嵌の碑文の発見をするまで、この武器の真の意義は知られていなかつた。

刀身の両面に書かれた銘文は、腐食して一部読めなくなっている。学者たちは 1 世紀以上にわたって碑文の解読に取り組んできたが、その解釈はいくつかある。しかし、そのメッセージは、この剣が現在の朝鮮半島にあった百濟の王（紀元前 18 年～紀元後 660 年）から贈られたものであることを示しているようだ。

日本の 8 世紀の年代記には、神功皇后の在位 52 年に「七叉の剣」が贈られたと記録されている。もしこの剣というのが石上神宮に保管されていた七支刀であったとすると、七支刀は 4 世紀後半のものということになる。しかし、象嵌された文字の正確な意味はまだ不明で、百濟と日本の国の関係の違いを示唆する解釈もある。

もうひとつの謎は、この刀の特徴的な形と、最も細いところだと数ミリしかない幅である。これらの理由から、七支刀は非常に重要な歴史的遺物であり、国宝である。その古さと壊れやすさを考慮し、空調管理された保管庫から取り出されることはめったにない。